

集中講義と伊藤和行さんの思い出

古川 安*

Reminiscences of Intensive Courses and Professor Kazuyuki Ito

Yasu FURUKAWA

10年を1世代とすると、伊藤和行さんは私より1世代下の科学史家である。それだけ歳下の研究仲間の追悼文を書かなければならないのは辛いですが、細やかな思い出を記しておくことでせめてもの弔意とさせていただきます。

私がアメリカ留学から帰国（1983年）してしばらくして、佐々木力編『科学史』（弘文堂、1987）の共同執筆者の顔合わせの席で伊藤さんと初めて知り合った。東京大学の大学院を出て、フィレンツェに留学する前であった。この本で伊藤さんは「ガリレオの運動論とその背景」と題する章、私は「産業界の科学者たち」と題する章を書いた。

しかし、より親しく接する機会を得たのは伊藤さんが京都大学に職を得て、京大での集中講義「科学哲学科学史特殊講義」に講師として3回招いていただいた時だった。京都での私の集中講義はいつも9月初めの5日間、朝から夕方まで行った。まだ夏の暑さが残る時期で、伊藤さんはいつも少し派手な柄の半袖シャツに短パンというラフな出立ちで大学に来ていた。昼休みは学食と一緒に食事をしたり、彼の研究室で弁当を食べながらおしゃべりをしたりして過ごした。学問的な話よりも、最近の京大生の話題とか、京都での生活とか世間話をするこのほうが多かったように思う。夜は奥様とまだ小さかったお嬢さんの同伴で、老舗の料理屋でご馳走していただいたこともあった。

最初の集中講義は2000年で、「20世紀の科学と社会」を主テーマにして欧米の科学史論文の輪読を行った。次はその翌年で、同様のテーマでJ. Krige and D. Pestre, eds., *Science in the Twentieth Century* (Harwood, 1997) を輪読し、時々関連のビデオ教材を入れたりした。学生の発表の割り当ては事前に伊藤さんをお願いしておいた。彼の専門は近代初期のイタリア科学だが、私の講義内容にも関心を持っていろいろな質問を受けた。院生と学部生の合同授業で、受講生は2回とも15名くらいだったと思う。今は京大の教官として活躍している喜多（石川）千草さん（現代文化学）、瀬戸口

* 総合研究大学院大学 客員研究員

明久さん（人文研）、それに杉本舞さん（現、関西大学）も受講していた。発表やディスカッションを聞く中で、京大の受講生は総じて反応が良く積極性があるという好印象を持った。そのことを伊藤さんに報告すると嬉しそうに頷いていた。

2006年、私はあるきっかけから戦前の京都帝国大学工学部の工業化学者・喜多源逸（1883-1952）とその学派の伝統についての調査・研究を始めた。歴史的に重要なテーマであるにもかかわらず、先行研究のないほぼ手付かずの領域であった。それを機に私の住む神奈川県から京都に頻繁に足を運び、関係者へのインタビューや、大学文書館、図書館、宇治の化学研究所などで史料調査を行うようになった。工学部の先生やOBの方々との繋がりが強くなったが、時間がある時は文学部の伊藤さんの研究室に立ち寄って雑談するのが良い息抜きになった。

そんな折、伊藤さんからまた京大で集中講義をやってみないかとの打診を受けたので、喜んでお引き受けすることにした。今度のテーマは「京都大学における化学」にすることで了解してもらった。その2010年の集中講義は午前中が私の講義、午後は学生に割り当てた関連文献の発表とディスカッションをした。その時の受講生には稲葉肇さん（現、明治大学）もいた。講義では、私がそれまで調査した喜多源逸とその弟子の桜田一郎や福井謙一らの経歴や京大工学部の伝統などについて論じたが、その時の学生諸君の質疑から大いに啓発されるところがあった。最終日には西山伸先生にお願いして京大大学文書館の見学会を行った。京大での集中講義は同じ講師が2年連続で行うことが慣行のようで、翌年の集中講義も打診されたが、あいにく本務校（日本大学）の校務が超多忙になり実現できなかった。

2010年の集中講義の時には、伊藤さんの研究室の片隅に天体望遠鏡が置いてあった。京都府の小中学校でガリレオと望遠鏡についての出前授業を始めたとのことで、そのことを楽しそうに語った。その3年後に彼が著した『ガリレオ望遠鏡が発見した宇宙』（中公新書）の「あとがき」にもこの出前授業のことが触れられている。

喜多源逸と京大の化学の伝統についていずれ本にまとめたという構想を伊藤さんに話したところ、出版社や本の書き方などについてあれこれ有益な助言をしてくれた。『化学者たちの京都学派—喜多源逸と日本の化学』と題してこの本が京都大学学術出版会から刊行されたのは、やや遅れて2017年末のことであった。出版後、関西に出張の折に京大に立ち寄り、お世話になったお礼を兼ねて彼にこの本を直接手渡した。伊藤さんからは彼が新訳したガリレオの『星界の報告』（講談社学術文庫、2017）をいただいた。原典を重視する伊藤さんらしい作品を見て私が咄嗟に「こういう仕事はずっと後になっても残るよ」と言ったのを覚えている。これが親しく言葉を交わした最後の

時になるとは考えてもみななかった。

年賀状のやり取りは続けていたが、病のことは何も知らなかったので、2021 年夏に突然の訃報に接して驚いた。京都を訪れても、もう伊藤さんとお会いできないのはとても寂しい。私も親しい気鋭の科学史家で同姓の伊藤憲二さんが新たに着任し、和行さんの研究室を引き継ぐことになったのがせめてもの慰めである。

伊藤和行さん、お疲れさまです。京都大学に導いてくださったことを改めて感謝しています。